

2000年10月

大学の勉強におけるレポートの書き方*♥

筑波大学 社会工学系 講師 祝迫得夫

E-mail: iwaisako@shako.sk.tsukuba.ac.jp

* Copyright © 2000 Tokuo Iwaisako (祝迫得夫).

♥ 授業の中で、本稿の作成のもとになったミニ・レクチャーの機会を与えてくれ、草稿にもコメントを頂いた梶井厚志氏と、レクチャーの際に有益な質問をしてくれた、数多くの筑波大学 社会工学類の新生に感謝します。

1. はじめに

このパンフレットは、筑波大学社会工学類の新入生が初めて受ける授業の一つの中で、大学の勉強における「文章の書き方」について話をするために用意した教材を、若干一般向けに書き直したものです。ここで念頭においている読者は、「言葉」や「文章を書く」ということ自体を勉強しているわけではないが、一方で専門とする分野の内容について、レポートを書く機会がしばしばある学生です。したがって、文学部や外国語学部を除くほとんどの学部の学生が対象となりますが、特に、将来、不特定多数の読者を相手に文章を書くこと機会が、多少なりともあるであろう分野（経済・経営・コンピューター関係・建築・都市工学等）を専攻しようとしており、しかも文章を書くことが自分ではあまり得意ではないと感じている学生が、一番の対象になります。

日本の大学の理工系学部や、数学を良く使う経済・経営等の社会科学系の学部では、研究の「内容」が最も重視されるべきだということが、しばしば言われます。これは、まったく間違っていない。しかし、欧米と比較した場合、現在の日本の大学教育は、「内容」をどのように表現するか・相手に伝えるかという訓練について、教師のほうも学生のほうも、あまりにも注意を払っていません。これらの分野を専攻する学生には、正規のカリキュラムの中で、「文章を書く」ということ自体について学び・訓練する機会は、ほとんどありません。したがって、このパンフレットの一番重要な目的は、新入生のうちに、大学の勉強の中でどういうふうに文章を書くべきかということについて、最低限の心構えとテクニックを知ってもらうことです。

しかし、単に書き方のテクニックを学ぶということだけについて言えば、本屋や大学生協の書籍部に行けば、「レポートの書き方」の類の本が幾らでもみつかります¹。教師の側としては、そのような書物を何冊か学生に示して、これを読んでおけと言えば、最低限の役割は果たしたことになるでしょう。ですが大抵の学生は、強制されない限りそんな本を読まないだろうし、それで結構、大学での授業を切り抜けられてしまうことも確かです。したがって、このパンフレットの第二の目的は、「文章を書く」という作業が、大学での勉強・研究において、そして大学卒業後の仕事・生活においても、いかに重要な意味を持っているかということを理解してもらい、各自で「文章を書くこと」を意識して訓練してもらうようになることです。

さらに、このパンフレットには、通常の「レポート／文章の書き方」の本には載っていない重要な点が、二つ付け加わります。まず、どのような道具を使って書くかという、実践上の問題。これは、今まさに大学生活を始めようという学生にとって、一番気になる問題でしょう。そして、もう一つは、専門的な文章を書く際には、決して避けて通ることができない、引用の仕方と著作権に関する議論です。こちらの方は、逆に、新入生にはその重要性が十分認識されていないので、ぜひ注意して欲しい問題です。

¹ ある書店の検索サービスで、『レポートの書き方』というキーワードを検索にかけると、44冊も該当する本が出てきました。

2. なぜレポート・論文の書き方を(改めて)訓練する必要があるのか？

大学での勉強と高校までの勉強の違い

高校までとは違い、大学の授業では多くのレポートの課題が課されます。高校・大学入試までの段階では、長い文章を書かされる課題というのは、感想文・小論文といった、与えられた問題に対して、ある程度、一定の形式で答えるものでした。これに対して、大学でのレポートは、多くの場合、広いピックの中から自分で対象を選んで研究し、その成果を報告・発表するという形式をとります。したがって大学でのレポートの性格は、小・中学校の時の、夏休みの自由研究などに近いと言えることができるでしょう。

また、高校までの勉強では、クラス・学年のほとんど全員が同じ内容を、同じスピードで学び、教師のほうもそれを前提として授業を行います。一方、大学での勉強は、基本的には自分の「専門」についての勉強であり、必修科目を除けば、学生は自分の好きな授業をとることができます。したがって、同じ授業を聞いている学生でも、それぞれのバックグラウンドや理解の程度は様々です。また、一つの授業を聞いている学生の数も、高校とは較べものにならないほど多くなります。私が教えている筑波大学の社会工学類では、最も人数が多い講義で、恐らく100人から150人が一度に受講しますが、この人数は、私立大学では決して多い方ではありません。当然のことながら、教師の方としては、学生一人一人の状況について十分理解した上で、丁寧に全部のレポートを読むだけの余裕はありません。したがって、書き手である学生側としては、読み手が自分のことを限定的にしか知らないという状況のもとで、取り上げたトピックや自分の取ったアプローチの妥当性も含めて、自分の考え・主張を読み手に伝えるようなレポートを書かなければなりません。したがって、大学でのレポートの作成には、高校までの作文・感想文や、大学入試での小論文に対するのとは、異なったアプローチが必要になってくるのです。

自分の専門についての文章を書く

大学での勉強と高校までの勉強とのもう一つの重要な違いは、大学の、特に三・四年になってからの勉強は、ある程度まで、実社会と直接に繋がっているという点です。大学入試の成績がいかに優秀だったところで、入試の知識が社会に出て直ぐに役に立つということはありません。高校までの勉強は、あくまで大学の、あるいは、社会に出てから仕事をしながらする勉強の、基礎となるべきものです。一方、大学では、学生が自分の専攻を決め、最終的には、それぞれの専攻分野の「専門家」になるための訓練を受けることになります。その後は、まったく関係のない仕事につく人もいるでしょうが、かなりの人が、大学での専攻と何らかの関わりがある職業につくことになるでしょう。そして実社会に出ても、メモ、報告書、企画書、顧客へのプレゼンテーション等々、やはり『文章を書く』という作業はついてまわります。そこで他人を納得させることができる文章を書けるか否かで、みなさんの仕事上の評価は決定的に違ってきます。みなさんが授業で書くことになるレポートは、程度や形式の差はあっても、『専門とすることについて文章を書く』という意味では、実社会に出てから書く文章と同じ種類のもので、そして、同じ分野の優秀な専門家に、自分の書

いたものを、ちゃんと読んでもらえるというのは、実に得がたいチャンスなのです。大学教師は学生のレポートを積極的に読む義務がありますが、一旦、実社会に出てしまえば、新入社員の書いたものを丁寧に読んでくれるような、積極的な読み手というのは、まず存在しません。正しい訓練を積んでいないせいで、大学生活において、さらには、実社会に出てから損をするのは、みなさん自身なのです。したがって、この機会に、文章を書くという行為が、社会の中で持つ重要性を、再認識してください。

3. レポートを書く際の基本的な心構え

読み手を意識する

ここまで書いてきたことで、ある程度わかるように、大学でのレポートの書き方を大学入試までの作文・小論文と区別する重要な点は、読み手を具体的に意識して書くということです。同時に、レポートの内容が、読み手の側で、著者であり情報発信者である自分と密接に結び付けられて理解されるであろうということです。したがって、どういう読み手に、自分のことをどういうふう理解してもらいたいのかということを、常に念頭においてレポートを書く必要があります。

こう書くと、大学でのレポートや論文の書き方というのは、非常に特殊なものであるかのように思われるかも知れません。しかし実際は逆で、現実の社会の中で文章を書く、一般的な環境を考えれば、書き手と読み手の関係をほとんど意識しなくて良かった、高校・大学入試までの作文・小論文の方が、よほど特殊なのです。

理解してもらうために書く・論理的に書く

大学のレポートや卒業論文で要求されるような文章の書き方は、英語でノンフィクション・ライティング (Non-fiction Writing) やテクニカル・ライティング (Technical Writing) と呼ばれるものであり、小説などのフィクションやエッセイの類の書き方と区別・対比されるものです。このようなタイプの文章の書き方に要求されるのは、一にも二にも、分かり易いこと、読み手に対して考えが正確に伝わることであり、文章として面白いことやエンターテインメント性は二の次です。その意味で、大学のレポートの文章が名文である必要性はありませんが、「読んでもらえるような文章」・「理解してもらえる文章」を書く必要があります。

次に重要なのは、最初から最後まで、徹底して論理的であることです。レポートで要求されることは、何かをまとめ、何かを論ずることです。その論じたい何かは、はっきりと相手に伝えることが第一の目標で、さらに、その主張に関して確固とした根拠づけがされていなければなりません。そして論理的であることが、分りやすく正確で、なおかつ説得力のある文章を書くことの最短距離なの

です²。日本の高校までの国語教育では、しばしば、「自由に書く」とか、「自分の思ったとおりに書く」ということが強調されます。みなさんが、これまでの学校生活の中で散々書かされたであろう読書感想文が、その最たる例です。逆に、「自分の主張を正確に伝える」「論理的に書く」という訓練は、日本の義務教育ではあまり強調されません。しかし、大学に入ってから勉強の中では、作文・感想文的な発想を忘れ、コミュニケーションの技術として、読み手に内容を理解・納得してもらうためのテクニックとして、分りやすく論理的な文章の書き方を身につけることを、心掛けてください。

4. 大学の勉強における望ましいレポート

よいレポート・論文の条件

さて、いよいよ、大学の勉強における望ましいレポートの書き方について、具体的に見ていきましょう。

① 目的に合っている

あたりまえの話ですが、提出されるレポートは、要求された課題に対応していることが前提です。例えば、「日本サッカー協会は、フィリップ・トルシエに日本代表の監督を続投させるべきか、解任するべきか」という課題が出たとしましょう。トルシエについて書くことが要求されているのに、ファンだからといって、中田英寿選手のことばかりを中心に書くのは、目的に合ったレポートとは言えません。

② 述べたいこと、主張したいことがハッキリとしている

まず最初に、自分の考えとして「トルシエを続投させるべき／解任するべき」ということを、明確に述べるべきです。レポートはディベートではないですから、自分の考えが Yes・No で簡単に割り切れるようなものではないこともあるでしょう。そのときでも、「ベンゲルが後を引き受けてくれる目途が経つなら解任だが、それ以外は続投」というように、できるだけ分りやすく、かつ正確に、自分の主張を打ち出しましょう。

③ 内容が正確であり、分りやすい

細かい内容が正確でなければ、たとえ大筋が正しかったとしても、レポート全体が胡散臭い目で

² 世の中には、「面白く、読みやすく、説得力がある」が、まったく「論理的ではない」という文章を書く名人がたくさんいます。こういう手合いの文章に騙されないこと、自分がそういう文章を書かないようにすることも重要なのですが、私が今まで受け持った筑波大学社会工学類の学生の中には、このタイプの書き手はほとんどいなかったのので、ここでは細かく論じません。

見られがちです。例えば、サッカーの日本代表監督の例で言えば、レポートの中で言及するなら、トルシエの生年月日や経歴については、100%正確な記述を期すべきです。また、日本人に特に顕著な悪い癖で、簡単に書ける内容を難しく書いて、あたかも文章が上手い・高級であると見せかけようとすることがあります。しかし、相手を煙に巻いて枚数を稼ぐことと、ちゃんと納得させることは別です。わかり難い文章は、ちゃんとした読み手からは、むしろ筆者の理解が十分でない証拠であるとして見なされることになります。

④ 論理的である

論理的な文章を書くことは、③でいう、正確で分かりやすい内容にするための、必要条件です。常に、論理的に矛盾や飛躍のない文章を書くことを心掛けましょう。

⑤ (できれば)面白い方が良い

「読んでもらう文章」を書こうとする以上、これは当たり前のことです。しかし、伝えるべき内容・主張がまずあって文章を書く以上、最優先されるのは①－④の条件であって、面白さはその次です。

⑥ 期限を守る

これも当たり前のことです。一つだけ、つけ加えれば、もし何か正当な理由で期限が守れないとあらかじめ思ったら、絶対に事前に、授業の担当教官にそのことを伝えて指示を仰ぐことです。まともな教師であれば、冷静に判断して十分な理由だと考えたら、無理矢理できそこないのレポートを提出させるよりは、若干の延長を許すでしょう。遅れて提出した上に、「実はこういう理由で...なので許してくれ(他の人間と同じように採点してくれ)」という言い訳をレポートに書き添えて提出するよりは、よほど好印象を与えます。

読んでもらうための体裁とスタイル

レポートを書く際には、文章そのものの「内容」や「わかりやすさ」が一番重要なのはもちろんですが、それ以外のレポート全体の外観やスタイルも、読みやすさに大きく影響してきます。大学のレポートの外観の体裁の基本は、いま読んでいる、このパンフレットだと思ってもらって構いません。個々の授業で特に指定されない限り、以下のルールを守ってください。

- * 紙のサイズは A4
- * 表紙をつける
- * 表紙には「授業名(担当教官名)」・「レポートの題名」・「所属(学部)」・「学籍番号」・「名前」を入れる
- * 横書きで、できる限りワープロを使う

- * 各ページの上か下の隅に、ページ数をいれる
- * 左上をホッチキス止めする

以上は、レポートだけでなく、普通の提出物や宿題でも同じです。その他に、レポートを書く際にぜひ注意すべき点として、以下の2点をつけ加えます。

- * 本文の最後に参考文献一覧をつける
- * 表・図・グラフの類は、本文の対応する場所に挿入するか、レポートの一番最後、参考文献の後に順番にまとめてつける。

ただし、学問の分野によっては、その分野特有の論文の体裁があります³。ある程度専門的な勉強をするようになって、俗に「ジャーナル」と呼ばれる審査付きの学術誌に載っているような、専門論文を読むようになったら、その分野でのレポート・論文に関しては、「ジャーナル」のスタイルを参考にするべきでしょう。

また、図表の類については、表は「表1・表2・表3...」と順番に並べて一まとめにし、図は図で別に一まとめにして、レポートの最後に持ってくることを勧めます。教科書などの日常に目にする出版物では、図表は本文中に出てくるのが普通です。しかし、我々が自分で書く場合は、相当に完成度が高い場合でも、最後にまとめる方が無難です。その理由としては、第1に、本文の中に入れて別にしておいたほうが、後で手直するのが、はるかに楽です。第2に、例えばグラフを本文の中に挿入しようとする、大きさを調整したり、別紙に印刷したのを切り貼りしたりするので、しばしばページ全体のレイアウトが汚くなってしまいがちです。その結果、逆に読みづらくなってしまふ場合がほとんどですので、よほどのことがない限り、図表はレポートの最後に持ってくるようにしてください⁴。

文章を書く基本的なテクニック

いよいよ、文章そのものの書き方についてです。これについて、細々と述べていくと、本を一冊書かなければいけなくなってしまいます。より細かい点について興味のある人は、このパンフレットの最後に、何冊か「文章の書き方」の本が挙げてありますので、それを参考にしてください。ここでは、基本となる原則と、最近の学生の文章に目立つ問題点について挙げておくにとどめます。

① 明確にわかりやすく書くことを心掛ける

³ 例えば、経済学関係の専門の学術誌では、まず間違いなく、参考文献をまとめて一覧にして、本文の後に持ってきます。これに対して、法律・政治などの他の分野では、本文の中で参考文献に言及があるたびに、脚注をつけて出所を示すことがあります。

⁴ 本文の構成と、文献一覧・図表の配列については、このパンフレットの最後の図1を見てください。

これは、常に読み手のことを意識して書くということに他なりません。この点については、マクロスキー(McClosky, 1987)が、経済学の論文の書き方についての本の中で引用している、科学哲学者のカール・ポパーの言葉が、すべてを言い当てています：

『私は、自分が書いたものに関する「述べていることが明確でない」という批判については、決して反論すべきではないということを学んだ。もし、良心的な読者がその文章を分かり難いと感じたら、それは書き直されるべきである。．．．．．私は執筆する際には、いつも誰かが私の肩越しに常に覗き込んでいて、明確でない部分を一つ一つ指摘しているかのように執筆している。』

② シンプルに、簡潔なスタイルで書くことを心掛ける。

理系の学問や、経済学・経営学といった学問について記述するのに、あえて文体に凝る必要性はありません。センター試験の国語の問題に出てきそうな文章は、学問に関する専門的な文章としては失格です。

③ 論理的に矛盾や飛躍のない文章を書く

④ 議論の根拠となる事実やデータを挙げる

この二点については、前にも言及したので、ここでは繰り返しません。

次に、経験的に(私が担当した筑波大学社会工学類の)学生のレポートに多く、注意すべき問題点について、幾つか挙げておきます。

⑤ 論点・主張は明確にし、最初に持ってくる

レポート全体の構成で言えば、序論のところで簡単な内容の要約を行い、なおかつ主要な結論・主張についても言及してしまう方が、読み手の側からすれば、ずっと読みやすくなります。レポートは、教師が学生の理解の度合いを評価する一つ的手段ですが、だからと言って書き手としての自分の考えを垂れ流すのではなく、一度、ちゃんと整理して、相手に分かりやすい様に書き直してから読み手に提示する、というプロセスをいつも踏んでください。同じ理由から、個々の段落に関しても、最初の文を読めばその段落で何を言おうとしているかわかるようにしておくべきです。

例えば、以下の二つの文章を比べてみて下さい。

例1: 「トルシエは、サッカー日本代表監督を続投させる／解任するべきだ。なぜならば、Aであり、Bだからだ。」

例2: 「トルシエは、Aであり、またBである。したがって、続投させる／解任するべきだ。」

例2の方も、一見、論理的に見えるかもしれませんが、結局のところ、自分の思考過程に読み手をつきあわせているだけです。読み手の側としては、最後の結論の部分に至るまで、なぜAやBの議論がされているのか明確ではありません。この程度の長さの文であれば、読む方も理解するのは

さほど難しくありませんが、これを数ページ単位、あるいはレポート全体でやられると、読む方としては堪ったものではありません。読む人を納得させようというのなら、原則として例1のスタイルで書くべきです。

⑥ 文体を統一する：敬体と常体を、ごちゃまぜにしない

一つのレポートの中では、「だ・である」の文体(常体)と「です・ます」調の文体(敬体)のどちらか一つを選び、すべてそれで統一します。例えば、このパンフレットの文章は、すべて敬体で書かれています。しかし、みなさんがレポートとして提出する文章については、基本的に「だ・である」の普通の文体で書いてもらって結構ですし、むしろそちらの方を勧めます。

⑦ 句読点の打ち方に十分注意する

句点(。)、読点(、)の打ち方については、これが決定版というようなものではありません。とにかく読者の立場になって読み返して、読みやすく、なおかつ内容が正確に伝わるように工夫してください。

書くことの訓練：繰り返し書き直すことの重要性

書くことの訓練の第一歩は、とにかく、まず書いてみることです。そうしなければ、何も始まりません。提出日の前日にレポートを書き始めるのではなく、早めに始めて、細かい部分は気にしないでいいから、とりあえず仕上げってみて、それから客観的に読み直して書き直すという習慣を身につけましょう。

良い文章を書く最大の秘訣は、とにかくにも、繰り返し書き直すことです。一番、最初の原稿を書いている間は、自分の考えをまとめて、それを文字にするのに精一杯ですから、具体的な読者を想定して書くところには至りません。まず原稿を仕上げ、それから読み手の立場に立って、自分の書いたものを読み直し、相手にわかりやすいように書き直します。時間が許す限り、読み返しては書き直すというプロセスを繰り返しましょう。また、友人同士で、互いのレポートを読んで間違いを指摘し、意見を言い合うというのは非常に有効です。それが無理であれば、少し時間をおいてから読み返す、声を出して読み上げるというのも、客観的に自分の書いたものを読むために役に立つでしょう。

5. 何を使って書くか？

前節でレポートを書く際は「ワープロを使う」と書きましたが、これは実際には「パソコンあるいは大学の計算機室の端末上で動くワープロソフトを使って書く」という意味です。10年程前までは、

「ワープロ」といえばワープロ専用機のことでした。これは、昔はソフト・ハードの両面でコンピューターの日本語処理機能が十分に発達しておらず、ワープロ専用機の方が、ずっと早く、しかも価格も安かったからです。しかし、現在のパソコンは、処理能力・価格ともワープロ専用機にほとんど引けを取りません⁵。さらに、経済・経営や理工系の勉強・研究をする場合、数式を処理する必要が頻繁に出てきて、これはワープロ専用機では、とても手に負えません。したがって、パソコンがあればインターネットやゲーム・表計算ができるという点を抜きにしても、コンピューターの上でワープロ・ソフトを使うことを強く勧めます。

また、ワープロを使うことで、文章の書き方は大きく変わってきます。紙に筆記具で書く場合、一度書き上げてしまうと、後からそれを修正するには非常に手間がかかります。特に、章立てや段落の入れ替え、大幅な削除や追加をしたりしようとすると、大抵、はじめから書き直さざるをえなくなります。ワープロならこの手の作業が非常に楽ですし、メモのような形で情報やアイデアを個別に書き留めておいて、後からまとめるという作業も、ワープロの「コピー&貼り付け」機能を使えば簡単です。さらに、一旦ラフな形で仕上げた後から、印刷したものをチェックすることで、校正の作業もぐっと楽になります。先ほども述べたように、何度も読み直し・書き直しをすることは、良い文章を書くために絶対必要ですが、ワープロを使うことで、この作業が非常に楽になることのメリットは計り知れません。

パソコンや端末上で動くワープロ・ソフトには、大きく分けて2種類あります。一番目は、通常の文章を書くために一般に使われているワープロ・ソフトで、マイクロソフト・ワード(Microsoft Word; 以下、MS-Word)と一太郎が、その代表です。ちなみに、この文章は MS-Word で書かれています。一昔前は、MS-Word と一太郎は同程度に使われていたか、むしろ一太郎のほうが優勢だったのですが、今日では MS-Word が完全な多数派です。多数派であることが、必ずしも使いやすいことを意味しないという点に大きな問題があるのですが⁶、友達に使い方を習ったり、共同で論文を書くときにファイル交換が容易だという点では、使っている人間が多い MS-Word を勧めます。

もう一つ、理工系の学生や経済・経営を専攻する学生にとって、マスターしておく非常に便利なのが、数式をきれいに処理するための、Tex(てふ)あるいは LaTeX(らてふ)と呼ばれるワープロ・ソフトです。通常、ワープロ・ソフトというのは、画面上で見たものが、ほぼ、そのまま印刷されて出てきますが、Tex や LaTeX の場合は、文章のレイアウトに関して、自分でプログラムを書いてやる必要があります。その分、面倒くさいのですが、逆に慣れてしまえば、数式の処理に関しては Tex・LaTeX の方がはるかに便利です。Tex・LaTeX のコマンドは、いたってシンプルなものですし、参考書の類はいくらでもあるので、ぜひ、早いうちに身に付けてしまってください。

⁵ ただし、作家・小説家のような、普通の文章だけを書くという職業の人にとっては、まだワープロ専用機の方が優れているといえるかもしれません。

⁶ ちなみに、私は MS-Word でこの文章を書いています。この理由から MS-Word が大嫌いです。

6. 正しい引用を行なう

高校までの勉強では、あまり注意していなかったことかも知れませんが、大学における専門の勉強・研究においては、正しい引用を行なうことは、非常に重要です。

ある研究者が、学問上、どのような基準で評価されるかといえば、それは論文であり、すなわち論文の中に含まれている考え方・発想の革新性であり、発見の新しさです。したがって、毎年ノーベル賞の受賞者が決まると、ノーベル賞委員会は受賞理由として、その人物の学問上の独自の業績のうち、主要なものを挙げ、テレビや新聞でも、それについての一般向けの解説がなされます。また、1980年代、AIDS ウィルスの発見について、アメリカとフランス、それぞれの学者グループの間で、どちらの発見が早かったが論争になり、一時は両国間の政治問題にまでなりかけました⁷。このことは、研究の内容の「新しさ」が、以下に重要な意味を持つかの、顕著な例と言えるでしょう。

このように、アイデアの新しさ・独自性が重要な評価基準である学問の世界では、論文の中で他人の業績を正しく引用せず、あたかも自分のアイデアであるかのように振舞うことは、最も恥ずべき行為であると見なされます。学問の世界で、著作権(英語では Copyright)という考えが非常に重要なのは、このためであり、(カラオケなどの場合とは違い)書いた書物や論文から発生する著作権料のせいではありません。したがって、例え研究者でなくとも、他人のアイデア・業績を、ちゃんとその出所を明らかにせずに引用することは、絶対に避けなければなりません。また大学の教師は、いうまでもなく自分が授業している分野の「専門家」ですから、みなさんが図書館やインターネットを使って半日で探して来た文献などは、大抵知っています。そのような内容について、ちゃんと引用することをせず、あたかも自分の考えであるような振りをして、素知らぬ顔でレポートに載せることは、非常に悪質な行為であると見なされるということを理解しておきましょう。もし、大学院の学生が修士論文・博士論文でこれを行なえば、間違いなく論文は棄却され、さらに(指導教官ともども)処罰の対象になりえます。たとえ将来、研究者にならないとしても、みなさんの大半は、特定の分野の「専門家」になるはずですから、他人の研究成果を利用してレポートや卒業論文を書くにあたっては正しい引用を行なうことを心がけ、学生時代から、そのような癖を身につけて置くようにして下さい。

実際の引用の仕方については、このパンフレットの中で行なわれている、幾つかの引用を見ていただければ、大体見当はつくと思います。

7. 最後に： よりいっそうの勉強のために

⁷ AIDS ウィルスの発見をはじめとする、研究者間の先陣争いについては、丸山工作(1998)「ノーベル賞ゲーム ——科学的発見の神話と実話」を参照。

まず手始めとして、このパンフレットに書いてあることを 100%守って書くようにすれば、学部レベルのレポートの書き方としては、十分、及第点だと思います。もし、もっと「文章の書き方」・「レポート・論文の書き方」について本格的に学びたいければ、大学の「国語」の授業の中には、そのような講義が当然あるはずですから、必要なら他学部まで出かけて行って、そのような授業をとってみるのも良いでしょう⁸。授業を単位としてとるのは、荷が重いと言う人は、本屋や生協の書籍部の本棚に行けば、その手の本が掃いて捨てるほどあります。ただし、文学・語学の専門家やジャーナリストが書いた本が大半で、理工系の学生や経済・経営を専攻する学生にとって本当に役に立つ本は、必ずしも多くありません。そこで最後に、私が実際に手にとって見た範囲で、理工系、経済・経営系の学部学生に直ぐに役立つようなものを、4冊だけ紹介しておきます。

江川 純(1998)「レポート・小論文の書き方」 日経文庫

ビジネスマンが書いた本です。内容は深くありませんが、具体的な記述で、必要最低限のことはすべて書いてあります。

木下是雄(1994)「レポートの組み立て方」 ちくま学芸文庫

物理学者が学部学生向けに書いた本で、上記の本に較べると、かなり突っ込んだところまで書いてあります。内容は、日本におけるこの手の書物の草分けと言える本である、同じ著者の「理科系の作文技術」に基づいていますが、もう少し一般向けに書き直してあります。得るところが多い本ですが、明らかにワープロ以前の本なので、最近の学生が読むと、多少古臭いと感じるかもしれません。

小野田博一(1997)「論理的に書く方法」 日本実業出版

篠田義明(1998)「通じる文章の技術」 ごま書房

この 2冊は、レポートというよりは、文章の書き方、そのものについての本です。これらを読むと、高校までの勉強における文章の書き方と、大学・実社会で求められる文章の書き方の違いが、よくわかると思います。

⁸ 筑波大学の理工系の学部レベルの教育の中でも、医学専門学群や生物資源学類では、国語は必修になっています。

参考文献

江川 純(1998)「レポート・小論文の書き方」日経文庫

小野田博一(1997)「論理的に書く方法」日本実業出版

木下是雄(1994)「レポートの組み立て方」ちくま学芸文庫

木下是雄(1981)「理科系の作文技術」中公新書

篠田義明(1998)「通じる文章の技術」ごま書房

丸山工作(1998)「ノーベル賞ゲーム —科学的発見の神話と実話」, 同時代ライブラリ, 岩波書店

McClosky, D. N. (1987) *The Writing of Economics*, Macmillan.

Zinsser, W. K. (1994) *On Writing Well: An Informal Guide to Writing Nonfiction*, 5th ed. Harpercollins

図1: レポートの構成と体裁

表紙

「授業名(担当教官名)」「レポートの題名」

「所属(学類)」「学籍番号」「名前」を書く

本文

「イントロダクション」(or 「はじめに」, 「序論」)

「本文」

「結論」(or 「おわりに」, 「結語」)

(必要であれば, 「付論」, 「Appendix」)

参考文献一覧

表

表1, 表2,

図・グラフ

図1, 図2,